



吉野作造記念館だより

〈編集・発行〉 特定非営利活動法人 古川学人

目次

史料紹介..... 1
 今年度の行事案内..... 2
 第6回吉野ネットワーク 人材育成研修会 3
 昨年度企画展紹介..... 4
 出張講演@東京都立総合工科高等学校..... 8
 大崎の「宝」＝「人」プロジェクト..... 10
 団体見学・出前講座..... 12
 研修報告..... 17
 昨年度のイベント..... 18
 寄贈資料一覧..... 20



村井嘉浩宮城県知事来館（2013年2月2日）

史料紹介

孫文の書額「天下為公」



この額は、中華人民共和国や中華民国で「国父」と尊敬されている孫文（一八六六～一九二五年）が、吉野のために書いた直筆の書である。清朝を倒し二千年来の専制政治を廃した辛亥革命は、中華民国を樹立しアジアで最初の共和制を実現した。しかし帝国主義による半植民地化、革命派と立憲派の対立など、内憂・外患を抱えた複雑な革命は中途で挫折し、その後も長期にわたる変革運動が続けることになる。

一九一一年の辛亥革命で生まれた共和制を反古にする袁世凱の弾圧では、多くの革命家が亡命を余儀なくされた。孫文は一九一三年に日本へ亡命し、革命組織の再編と、支持者との交流、および資金作りの活動を続けた。

一九一五年六月五日に孫文は、築地の同気倶楽部で開かれた外交問題の研究会で演説を行っている。吉野はこの演説を聞いたあと、戴天仇を通じて孫文たちと午後十一時まで会食、歓談をした。この書はその際に吉野のために書いたものと推測される。

「天下為公」（天下へをもつて）公と為す、「礼記」礼運篇）とは、「天下は君主個人のものではなく、公民のものである」という意味で、孫文が揮毫を頼まれると好んで書

く言葉であった。絶望から再び立ち上がる決意で書かれたと思われる。

孫文と吉野の交流を示す貴重なこの額は、東京の吉野家から二〇〇六年に当館に寄贈されたが、劣化が進んでおり複製品を展示していた。二〇一二年夏に仙台の佐藤精美堂にこの修復を依頼し、現在の实物展示に至った。修復作業を通じて、本紙が十数枚に分割されていた事が分かった。書額は横書きに収まっていたが、当初は縦書きだった書を一字ごとに切り離し、横書きに張り替えたと思われる。

吉野は中国や朝鮮からの留学生をはじめ、中国革命を担った多くの人たちと交流し支援していた。吉野に寄せられたいくつもの書は、これら革命志士たちが吉野に寄せた信頼の証でもあり、一九一七年に吉野は「支那革命小史」を著してこれに込めている。

列強の干渉と軍閥の混戦で革命が停滞した意味を誤解して、中国を蔑視し満州事変から十五年戦争に至った歴史がある。吉野はそれ以前にこの冊子で、「日本が支那に対して為せる行動を反省すること」を求め、「支那に求めたものは日本の真に必要とせしものか否か」を問い直している。

（鈴木光太郎）

2013年度の

行事案内

●4月21日(日)～5月19日(日) 公開講座

「吉野作造と明治文化研究

－吉野さんは奇人変人？－ (全4回)」

●5月5日(日)

GW イベント

こどもの日にちなんだ工作など、楽しい企画が盛り沢山！



●5月26日(日)～7月28日(日) 企画展

明治文化研究の奇人変人たち

－吉野作造・尾佐竹猛・宮武外骨－

●8月4日(日)

サマーイベント

家族で楽しいコーナーがいっぱい！



●8月下旬～9月上旬(予定) 研修会

吉野ネットワーク交流事業

人材育成研修会
若手学生の人材育成と吉野博士のネットワーク構築を目的とした合宿研修会。【人材育成研修会 イメージ図】
人と人のネットワーク構築

●10月20日(日)～12月23日(月) 企画展

「中国展(題未定)」

●秋頃

講演会

「第3回吉野作造研究賞」贈賞式及び記念講演会

★最優秀賞 ^{チョンサンウン}趙星銀氏

論文「高度成長」反対－藤田省三と「一九六〇年」以後の時代」

(『思想』2012年2月号掲載論文)

「吉野作造研究賞」は、平成24年度より公募条件を変更し、若手研究者の優れた研究活動を支援するために設ける賞としました。平成24年度に公募・審査をし、平成25年度は贈賞式と記念講演を実施します。

●10月～11月頃

講演会

読売・吉野作造賞受賞者講演会

●12月中旬頃

クリスマス会

キリスト教徒である吉野博士にちなんだ企画。サンタも来るかも…。



●1月29日(水)

イベント

吉野博士生誕136年&開館19年生誕記念イベント

●通年 出前講座・団体見学受付中

お客様のご要望に合わせたオーダーメイド見学ができます。お気軽にお問い合わせ下さい。

【講話の例】

- ・エコロジーとデモクラシー
- ・人格教育者としての吉野作造
- ・恋愛結婚と吉野作造
- ・新しい「公共」と吉野作造 など

第6回吉野ネットワーク交流事業

人材育成研修会

二〇一二年八月三十一日～九月二日

吉野作造記念館では、全国に吉野博士の功績を顕彰する事業の一環として、人的ネットワークの構築を目的とした合宿研修会を行っています。講師は読売新聞社・中央公論新社主催の「読売・吉野作造賞」を受賞した先生方を中心に、ネットワーク構築を進め、研修会に全面的にご協力を頂いております。参加学生は、講師の推薦する学生が主体です。活発な議論・討論をはじめ、講師と学生の交流の



全体討論会（吉野作造記念館研修室）



制・大統領制・民主政治の理解」、青山学院大学特任教授の猪木武徳氏が「デモクラシーをどう擁護するか」の講義を行いました。

最終三日目には、成果報告を兼ね、一般公開の全体討論会を行いました。参加講師、参加学生等の詳細は以下のとおりです。

●講師（敬称略）

猪木 武徳

（青山学院大学院特任教授）

阿川 尚之

（慶應義塾大学常任理事、総合政策学部教授）

荻 部 直

（東京大学法学部教授）

清水 唯一朗

（慶應義塾大学総合政策学部准教授）

小川原 正道

（慶應義塾大学法学部准教授）

村 井 良 太

（駒澤大学法学部准教授）

手 嶋 泰 伸

（東北学院大学非常勤講師）

●参加学生
慶應義塾大学 一一名
東北大学 七名
計一八名

場を設けています。この研修会を通じて、将来の日本をリードする人材を育成し、全国に吉野ネットワークの輪を広げていくことが狙いです。第六回目となった二〇一二年年度の人材育成研修会。初日は一般来場者も対象にした基調講演として、駒澤大学法学部准教授の村井良太氏が「政党内閣制と吉野作造」というテーマで講演を行いました。中新田交流センターに会場を移した二日目は大川真当館副館長が「幕末における共和

2013年度 企画展

明治文化研究の奇人・変人たち

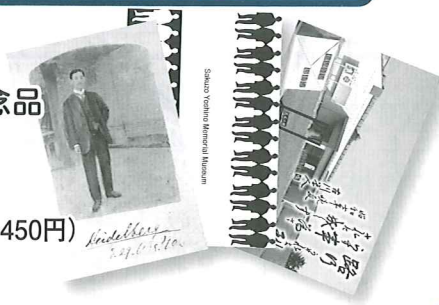
— 吉野作造・尾佐竹猛・宮武外骨 —

5月26日～7月28日

ポストカード発売中!!

お土産 & 記念品
どうぞ!!

(3枚セット、450円)



学習ルーム貸出中（無料）!!

当館には宿題や
受験勉強ができる
学習ルームが
あります。
ぜひ、ご利用下さい!!



企画展紹介

末は博士か大臣か

— 兄・作造と弟・信次 —

二〇二二年五月二七日～二〇二二年七月二九日

大崎市古川の糸綿屋「吉野屋」に、日本の学界と官界をリードした兄弟が誕生しました。長男の法学博士・吉野作造、そして三男の商工大臣（戦後は運輸大臣）・吉野信次です。信次は戦前から中小企業の育成や労使協調に尽力し、戦後日本の経済成長の礎を築いた人物です。彼の業績や人物像を、経済産業研究所蔵の貴重な資料などによって紹介しました。

I 故郷・古川と吉野信次

宮城県北部の古川（現：大崎市古川）で、吉野信次は、綿屋「吉野屋」を営む父・年藏と母・こうの三男として生まれました。信次は生後間もなく叔父夫婦の養子となるが、一四歳で実家に戻った。作造と信次は年齢が一〇歳も離れており、二人がともに過ごせた期間は、幼少期の四年間だけであった。しかし二人は、文化的環境にめぐまれた古川で、読書や村芝居、学校を通して成長していった。また吉野信次は、兄の作造の夫人であるたまの妹、きみよと結婚した。この二組の兄弟姉妹

を扱った戯曲「兄おとうと」

は、故井上ひさし弊館名誉館長の評伝劇である。東北の農村の疲弊、実家の倒産といった現状をみて育った信次は、農商務省への勤務を皮切りに、労働者問題や中小企業の振興に携わることになった。

II 知識人・政界・財界のネットワーク

一九〇六（明治三九）年に旧制第一高等学校に進学した信次は、生涯の師と仰ぐことになる人物・新渡戸稲造と出会った。信次は、第一高等学校校長だった新渡戸から哲学や文学などを通して大きな影響を受けることになる。



対抗できる新たな産業のあり方を模索し、いわゆる産業合理化を推進した。信次は「企業の自主性」をキーワードに、政府の一方的な産業の再編ではなく、自主性に基づいたカルテル化、企業間の協調性を重視した再編を行った。

こうした信次の方向性は、生家の「吉野屋」が中小企業であったこと、また国際市場に対抗できず倒産の憂き目に会ったことが背景にあったと考えられる。

信次が打ち出した産業合理化政策や中小企業政策は、戦後にも一部が引き継がれ、高度経済成長の礎の一端を担うこととなる。その意味では、信次は日本の驚異的な高度経済成長の、いわば陰の立役者であったとも言えよう。

独立行政法人経済産業研究所のご協力により、信次が関与した政策の原案および現物を展示した。

III 中小企業の育成と労使の協調

商工官僚時代、信次は日本の産業を再編し、国際市場に

生じた昭和三陸地震・津波、またそれに伴う凶作により、日本の穀倉地帯のひとつである東北の農村は疲弊することになった。

信次は、東北の産業振興と復興を目指し、渋沢栄一ら実業界の支援を受けて様々な復興策、振興策を提案していった。中でもアメリカのルーズベルト大統領によるたニユー・ディール政策を模した、大規模な河川開発とダム建設、そして電力供給を目的とした公共事業を提唱した。テネシー川流域開発公社（TVA）に倣い、のちに「KVA」と呼ばれた北上川流域の総合開発は、信次の提案によるものであった。

二〇一一年に起こった東日本大震災、この未曾有の災害から迅速な復興が叫ばれているものの、具体的な復興策は未だ見えていない。吉野信次はピンチをチャンスに換え、豊かな日本という希望を持って諸政策にあたった。この企画展を通して、一日も早い復興と第二の吉野作造、吉野信次の登場を期待したい。

IV 東北の産業振興と吉野信次

一九三三（昭和八）年に発

企画展「末は博士か大臣か」開催記念講演会

東北に明るい光を

—吉野信次と東北電力—

二〇二二年五月二十九日

会場：東北電力株式会社古川営業所

講師：大川 真（吉野作造記念館副館長）



企画展「末は博士か大臣か」の開催にあたり、協賛と資料提供を頂いた東北電力の古川営業所において、特別講演会を行いました。企業向けの講演会は当館初の試みです。

内容は、吉野信次と彼が取り組んだ東北の産業振興

に関してでした。信次は東北電力の前身である東北興電力株式会社の初代社長を務めました。彼の来歴と、振興電力社長時代を含め戦前戦後を通じて取り組み続けた東北開発に対する理念を説明し、震災後の東北復興という課題と向き合う上で、信次の構想と取り組みを見直す重要性を強調しました。

聴講した社員の方々は、信次と東北電力のつながりを知らない方も多く、同社の先輩でもある信次の事跡に関する話に熱心に耳を傾けてくださり、復興に向けた決意を新たにしていたようでした。

平成25年度 各種募集のお知らせ

気軽に参加できる フリーマーケット開催のお知らせ

期間 4月～7月（毎週日曜日）
10時～15時

※悪天候の場合は中止となります。
キャンセルの場合は事前にご連絡下さい。

会場 当館前広場

出店料 1区画 500円
（終了時に当館受付にて徴収します。）

出店内容 1区画（縦3m×横3m）
出店に必要なものは出店者が準備。

出店場所 当館で決めさせていただきます。

販売できる内容 衣料品・工芸品等

販売出来ない内容 車での出店、飲食関係

申し込み チラシ下部の申込み書に氏名・年齢・住所・電話番号・販売内容・参加予定日を明記の上、当館まで提出していただくか、お電話・メールにてお申し込み下さい。

協賛募集のお知らせ （通称：YOSHINO サポーター）

当館では、吉野作造記念館の運営を応援する協賛企業・団体・個人を募集しています。ご協力いただいた皆様には、社名等を広報物へ掲載するサービスがあります。ぜひ、ご協力のほどを宜しくお願いします。

★Aコース 50,000円 10者募集

★Bコース 30,000円 15者募集

協賛広告内容例

- ・企画展チラシ・ポスターへ掲載（2回）
- ・吉野作造賞講演会チラシ・ポスター（1回）
- ・当館ホームページ掲載（1年間）
- ・当館入口への看板掲載（1年間）

申し込み チラシの下部申込み書を当館まで提出していただくか、お電話・メールにてお申し込み下さい。

お気軽にお問合せください！ TEL 0229-23-7100 / FAX 0229-23-4979

Mail yoshino-npo.fg@blue.ocn.ne.jp

チラシを
ダウンロードできます → WEB <http://yoshinosakuzou.jp/>

企画展紹介

知の普及と出版

—吉野作造とユニヴァーシティ・

エクステンション—

二〇二二年一月十八日～二〇二三年二月一日

専門的な知識・学問を一般社会に広く伝えようとする大学普及運動（ユニヴァーシティ・エクステンション）。企画展では、吉野のユニヴァーシティ・エクステンションを宮城県大崎地域の知的伝統や近代日本の歴史の中で捉え、今日における知識や教養、学びのあり方を問い直しました。

I 大崎の知の伝統

大崎の知の伝統として取り上げたのは、江戸後期に現れた三人の学者—名取春仲、齋藤竹堂、小野寺鳳谷—である。名取春仲（一七五九—一八三四）は岩出山に造り酒屋名取屋の子として生まれ、後に天文道を学び暦学者となる。洪川春海以来の天文道を伝承する京の土御門家の直弟となった春仲は、故郷岩出山で天文道の教授を身分不問で行い、また優れた門人を土御門家へ斡旋した。大崎において、学問の身分的・地域的隔たりを乗り越えんとした先駆者と言える。

齋藤竹堂（一八一五—一八五二）は沼部村（現・大崎市田尻）に生まれた。仙台藩で学び、さらに江戸・京都・大坂、長崎を遊学し、江戸幕府の学問所である昌平黌で舎長となる。後に涌谷の郷学「月将館」の学頭となり、その黄金時代を築いた。欧米列強の動向に注目した竹堂は、アヘン戦争を分析した史論『鴉片始末』を執筆し、幕末の思想に大きな影響を与えた。

小野寺鳳谷（一八一〇—一八六六）は仙台藩茂庭氏の家臣から藩校養賢堂指南役となった。洋砲の製造、軍艦の建造の監督にあたり、洋式軍艦「開成丸」を完成させる。



企画展 知の普及と出版

吉野作造とユニヴァーシティ・エクステンション

さらに海防、経世、殖産、興業まで幅広く尽力し、また石巻に学校を開き教育にあたった。一八五三年には藩命を受けて蝦夷地を歴遊し、その記録である「北遊日箋」は幕末における蝦夷地警護において貴重な参考書籍となった。

企画展で取り上げた三人に限らず、人々の往来や文化・経済が発展していた江戸時代後期には、ここ大崎でも知の普及を介した幅広い人間の交流があった。こうした土壌が、

やがて吉野作造のような人物を育むことになるのである。

II 明治の啓蒙と出版

一八七三年、アメリカから

帰国した森有礼が、国民の知的向上のための啓蒙活動を目的に結成したのが明六社である。この明六社には、加藤弘之や西周、津田真道、中村正直、福澤諭吉など多数の知識人が加わった。明六社の機関誌として発刊されたのが『明六雑誌』である。『明六雑誌』では、

学者のあり方、男女同権論の是非、哲学、信教の自由などの宗教論、文字の改良による国語問題、さらには死刑の是非など、幅広い議論が行われた。

明治の啓蒙思想家でとりわけ傑出した存在だったのが福澤諭吉である。福澤は中津藩（現・大分県中津市）の出身で、大阪の適塾で緒方洪庵に蘭学を学び、幕臣として登用された後には遣米使節団にも随行した。代表的著作である『学問のすゝめ』は、日本が主権国として独立するために個人が自立が必要であり、それを促すのが学問であるという趣旨に基づいて著述されている。この『学問のすゝめ』を出版したのが、福澤が

独自に立ち上げた出版社「福澤屋諭吉」である。

福澤が出版事業に参入した当時、日本の出版は江戸時代の出版の延長線上にあった。江戸時代の出版は、書林と呼ばれる書店が中心で、出版に関する経費全般をも掌握していた。執筆者は、現在のような印税は入らず、書林が提示した扶持を受け取るだけであった。「福澤屋諭吉」は出版事業を書林任せにしない、明治時代にふさわしい新しい出版の形態を作り出した。

III 吉野作造のユニヴァーシティ・エクステンション

大学開放運動（ユニヴァーシティ・エクステンション）とは、大学教育を閉ざされたキャンパスの中だけで行うのではなく、広く一般社会に開放しようとする運動である。この運動はヨーロッパ各国、さらにアメリカなどでも見られ、公開講座や通信教育などの教授法が発展・確立した。日本では家永豊吉が、シカゴ大学の講座学習科特任教授として同大学のユニヴァーシティ・エクステンションに大

大きく貢献するなどしている。

吉野作造は西洋留学中に、こうした「新しい大学」を目の当たりにし非常な衝撃を受ける。ドイツで出会った下宿

先の女中が、夜学に通い高度な学問を学んでいたことに感銘を受けた吉野は、教育の開放と共有こそが、市民の間に「自由と平等」の意識を育み、デモクラシーの基礎になると考えるようになる。吉野は同じく留学中であつた京都帝大法科助教授の佐々木惣一と意気投合、同じく科学分野でのユニヴァーシティ・エクステンションを構想していた一戸直蔵、中沢臨川とも手を組み、大学普及会が結成される。

大学普及会の事業の根幹となつたのは、一般向け講義録である『国民講壇』である。内容は法律・政治から自然科学、文芸に至るまで多岐にわたり、主に東京帝大を中心に気鋭の学者が多数執筆した。『国民講壇』は経営難のためわずか六号で廃刊となつたが、短期間ながらも確実に存在感を示した。なお本企画展では、これまで所在不明とされていた『国民講壇』の第五・六

号を、東京大学出版会の竹中英俊氏、金光図書館のご協力で発見、展示、また内容分析をすることができ、吉野研究としても大きな意義があつた。

IV 戦後の出版と教養

戦時中の言論弾圧が去ると、知識人たちは再び知の普及活動に取り組みはじめた。東京大学総長となつた南原繁

は、戦中の反省から「大学の自由」を守ることを重んじ、大学人が安心して専門書を刊行できる環境作りのため、東京大学出版会を創設する。同出版会は、「大学に於ける研究とその成果の発表を助成するとともに、広く一般書、学術書の刊行により学問の普及、学術の振興を図る」という趣意の下、現在まで六〇〇点以上の著作を世に送り出している。大学出版は吉野も取り組んだユニヴァーシティ・エクステンションの重要な柱でもあつた。

戦後に現れた新たな知の巨人としては、丸山眞男が挙げられる。丸山は、戦前のリベラルを代表するジャーナリスト・長谷川如是閑などの強い

影響を受けて育ち、戦中には官憲による拘禁を受け、さらに東京帝国大学助教授でありながら徴兵されて広島で被爆するなど、個人の自由と国家権力の狭間でその思想を形成した。専門である日本政治思想史の研究にとどまらず、ジャーナリズムにおける戦後政治への言及や行動まで幅広く活動、戦後民主主義のオピニオン・リーダーとして八面六臂の活躍を見せた。

南原繁、南原の後任として東京大学出版会を率いた矢内原忠雄、また丸山眞男といった知識人たちは、大正時代以来の教養を重んじる時代の空気の中で育つた。世界の古典的な文学、芸術、哲学書などに感化を受け、人格を發展、向上させようとする教養主義の思想である。かつて知識人は社会全体ではごく一握りの、特殊で権威的な存在だった。しかし、戦後は大衆化が進み、メディアも多様化していった。人々が求める知識や情報の形も次第に変わっていく。吉野作造が取り組んだ知の普及も、変わりゆく時代に対応していくことが求められている。

企画展「知の普及と出版」オープニングセレモニー

東京大学出版会 竹中英俊氏 講演



日本出版史における
吉野作造の位置
— 大学出版を中心に —

当館二〇二二年度後期企画展「知の普及と出版」吉野作造とユニヴァーシティ・エクステンションの開催初日となる一月一日、オープニングイベントとして、東京大学出版会常任顧問の竹中英俊氏による講演「日本出版史における吉野作造の位置—大学出版を中心に—」を行いました。

竹中氏は大崎市(旧・古川市)出身で、古川高等学校の卒業生でもあります。大学卒業後、東京大学出版会に勤務し、三十七年以上にわたり大学出版の現場の第一線で活動されてきました。

講演内容は、まず吉野作造が「知の普及活動」の意

義を学んだ留学先である、ドイツ・ハイデルベルグでの吉野の足跡を辿り、さらに福澤諭吉、家永豊吉、高田早苗、南原繁、矢内原忠雄らが代表する日本の大学出版史の中で、『国民講壇』などの吉野の出版活動を評価するものでした。

竹中氏自身が探訪したドイツ・ハイデルベルグは、色鮮やかな町並みの写真などと併せて紹介され、来場者は若い吉野作造が学んだ西洋の雰囲気を感じることもできました。

なお、同講演に関連して、『吉野作造研究』第九号(二〇一三年三月)に竹中氏の「吉野作造のハイデルベルグでの下宿先」を掲載しています。

出張講演@東京都立総合工科高等学校

二〇一二年一月二日

被災地のその後を記録したドキュメンタリー番組を視聴して学んだこと、そして、これからの自分の人生に役立てたいこと

教諭 佐々木 純

(一)はじめに

吉野作造記念館の御協力を得て「他者との共生のための他者理解」について、東日本大震災を事例とし人と人との共感や支えあいを観点に探求する授業実践をした。本校は進学重視の新しいタイプの工業高校で、三年選択の倫理で実践した。震災から時間が経過し被災体験に乏しい生徒が共感的に受け止められるか不安があったが、教材に落涙する生徒もいた。

(二)授業のねらい

倫理は高校における道德教育として、人間の生き方に関する教育の役割が期待されている。学習指導要領に、生命に対する畏敬の念に基づいて他者と共に生きる主体として



の自己形成が目標に設定されている。命に対する畏敬の念に根ざした人間尊重の精神を培うことで、人間が他者との関わり合いの中で調和的に生かされた存在であることを自覚させることが出来る。故に、自己の生き方も他者への共感

と共生の中で追求させる必要がある。更に、この他者との関わりについて主体的に適切な関係がもてるように自己を確立させなくてはならない。

(三)達成するための方法

このねらいを達成するには、生徒個人に身近な生活経験を事例に考察させるべきだが、個別的で全体として共有すべき課題とはなりにくい。そこで、生徒全員が体験した東日本大震災で被災した同世代の人たちの体験に共感し自己の生き方を省察させることにした。

(四)学習活動

授業構成として、先ず、被災地のその後を記録したドキュメンタリー番組を視聴しながらワークシートを各自作成する。次に、各グループ内で意見交換してグループ毎に発表する。最後に講師の先生からコメントを頂戴しディスカッションする活動を実施した。

(五)事後指導

他者の尊重と他者への奉仕を考察させるため、先ず、他者とは何かに就いて「他者には私にはないものがあるから尊敬」としたレヴィナスの考えを紹介した。次に、尊敬すべき他者をなぜ蔑ろにするのかについて、ハーバーマスの「他者とのコミュニケーション」の中に生きていることを忘れていくから、対話的理性で合意形成していくことが求められるとした考えを提示した。更に他者への奉仕に就いてサルトルの「自己の行動は社会に対して道德的責任をもつこと」という考えを前提に、ハイデガーの「困っている人に必要なことを与えることではなく、その人が能力を発揮できる手伝いをする」と。そのことで、自己実現と他者の尊重の両立がはかれる活動」にすることが、望ましい奉仕であると指摘した。

「他者の重要性を知ることが倫理のはじまり」とした先哲の考え方もふまえて、震災で被災した同世代の人達を共感的に理解し、自分達のこれからの生き方についてどのよ

うに考えるか。以下の作品に結実した。

レポート①

三年二組 加賀美一葵

私がこの映像を見て学んだこととして、人の心の痛みや辛さを勝手にわかった気にならないこと。また、毎日自分の身の回りにいる大切な人達に思いやりをもって必死に生き抜いていくこと。そして、できる限り、後悔をしないような生き方をするのだと思います。

まず、「他者との共生のための他者理解」について考えていきます。

震災が与えた精神的傷としては、自分の大切な人が突然死んでしまった現実をなかなか受け入れることができないことである。あまりにも衝撃的なことすぎて、頭では現実をわかっているつもりでも、行方不明者の方のお葬式を行おうとしたりすると、「まだ死んだと決まったわけではない」と拒んでしまうなど、簡単に「死」というものを受け止めることはできないのだと

思います。

その精神的傷をどのように克服していくかについては、人と人との絆というものを大事にしていくこと、亡くなってしまった人達の分までしっかりと生き、再び歩を前に進めていくことが大切なのではないかと思えます。

また、亡くなった人達については、亡くなってしまった仲間の誕生日を祝うなどして、絶対にその人達を忘れないようにすることが大切。その人達を思い出す時は震災の時のような悲しい記憶ではなくて、一緒に過ごした楽しい記憶で思い出すことなど、できるだけ、仲間のことを「思う」ことが一番心に記憶させられるのだと思えます。

さまざまな事情をもった人達と共生していくには何が必要なのかというと、周りの人達がどういう環境なのかを考へることが大切だと思う。自分一人では絶対に生きられないし、自分が思っている以上に他者からも思われているから、自分のことばかりではなく周りの人達のことも考えて生きる必要があると思いま

す。ありふれた日常生活を送っているとあたり前のことが意外に忘れがちなのだと思います。

以上の「他者との共生のための他者理解」を踏まえたいえで、これからの自分の人生に役立てたいことを考えていきます。

他者についてレヴィナスは「他者には私にないものがある」と言っており、他者の重要性を知ることが大事なのだと思います。また、ハイデガーは「本当の奉仕はその人の能力を発揮させる手伝いをする事。そうすることで、相手も自分も成長できるからなのだ」と。関上中学校での出来事もそうでしたが、常日頃から周りの人を思って生きていくことが一番大事です。自分のことだけで精一杯のようないっぱいっばいの生き方では自分のことはもとより、周りに迷惑をかけることになりません。毎日を後悔しないように生きていくのは難しいことではあると思えます。しかし、後悔を一生背負って生きていくことほど辛いことはないと思うので何もせずに

ただ生きていくより、努力をして必死に毎日を生き抜いていくべきなのだと思います。

レポート②

三年一組 和田翔太郎
私は震災から時間がたち少しだけ震災が起きた時のことを忘れてきていた。

授業で被災地の中学校の映像を観て震災の起きた時の事を思い出した。映像の中で大切な人を亡くし、辛い体験をしたにも関わらず助け合いながら前に進むと一生懸命に生きている被災地の中学生やその親達にとっても心を打たれた。

しかし何故、大切な家族や



友人を突然失うという言葉に出来ないような辛い体験しても前向きに生きていくことが出来ているのか。それは、同じ体験をした人達で支え合いつながりながら生活をしているからではないかと思つて。とても自分一人だけで抱え込んでいてしまつては精神的にも肉体的にも限界が来てしまつたらう、そうなれば最悪の場合、自ら命を断つようなことをしてしまつてもいい。

そうならず前向きに生きていられるのは、亡くなった人達の分まで生きなければという思いもあるかもしれないがやはり他人と支え合い、辛い思いを分かち合ひながら過ごしているというのが一番大きいだろう。

私も昨年の八月頃に、私が生まれる前から家で飼っていたメグという名の猫を亡くした。その時、今までに経験したことのないとつともない喪失感と悲しみを感じた。家に帰っても膝の上で寝ていたメグはもういないんだ、そう考へるだけでもとても暗い気持ちになつてしまつていた。それでも立ち直りメグがい

今までありえなかった生活でも過ごしていくことが出来たのは、親戚や家族で悲しみを分かち合うことが出来たからだろう、とても自分一人だけでは決して耐えることはできなかっただろうと思つた。

被災者の方に比べれば私が感じた「喪失感・悲しみ」というのも大したことがないかもしれない。それでも一人きりでは耐えることが出来なかつたのだから、他人と支え合ひながら、悲しみや苦しみを分かち合ひながら生きていくというのがやはり人間にとって一番大切なことなのだ。「他人なんてどうでもいい、他人と助け合はずとも自分だけで生きていく」ことが出来るという人もいるだろうと思つた。それでも私は、他者と共存し助け合ひながら生きていく方が人間らしくいい生き方だと考へる。

自分だけの事を考へるのでなく他者の気持ちを理解し、助け合つて生きていけるような人間になれるようにこれからの人生の一日、一日を大切に過ごして行けるようにしていきたい。

「大崎の『宝』 = 『人』プロジェクト」とは？

2011年度より、吉野作造記念館指定管理者であるNPO法人古川学人は新たな取り組みとして、下記諸団体と協力し「大崎の『宝』 = 『人』プロジェクト」を実施しました。このプロジェクトは、大崎市及び近郊の学生・未就業の若者を対象とした講座「大崎未来塾」を開講し、未来の大崎を担う人材の育成と、「知る・教える（学ぶ）・話し合う・共有すること」の地域間・世代間ネットワーク構築による地域振興を目指したものです。

レポート

大崎の「宝」プロジェクト

平成二三・二四年度宮城県採択 新しい公共の場づくりのためのモデル事業

I オピニオン部門



千葉眞氏講演会（4月21日）

「大崎の『宝』 = 『人』プロジェクト」では、「オピニオン部門」「アーティスト部門」「エコロジスト部門」という、未来を担う人間力の三つの基軸を設定し、その養成のための「大崎未来塾」を開講しました。

オピニオン部門では、各界

の第一線で活躍する方々の基調講演をもとに、若者たちが公論・熟議を行うという講座を行いました。四月二二日の第一回目は、「宝」 = 「人」プロジェクトのオープニングも兼ね、国際基督教大学教授・千葉眞氏による講演「新しい『公共』と熟議デモクラシー」が行われました。テーマは現代のデモクラシー論の中で、吉野の民本主義を位置づけてその今日的な意義を探ることでした。吉野の考えたデモクラシーとは単に制度的なものに止まらず、民衆の生活、思想、文化の営みにより育まれるものであり、近年盛んになってきた、官に依存しない市民による「新しい公共」の枠組みの提言や、NPO・NGOによる社会活動などには、吉野が説いたような「非制度的デモクラシー」の精神が根付いておらねばなら

大崎の「宝」 = 「人」プロジェクト実行委員会 加入団体
NPO法人おおさきエフエム放送、NPO法人古川学人、おおさきアーティスト育成委員会、シアターグループOCT/PASS、NPO法人未来創造おおさき、大崎自然界部、NPO法人蕪栗ぬまっこくらぶ、NPO法人田んぼ、NPO法人エコパル女沼、東北大学大学院農学研究科附属複合生態フィールド教育センター、大崎市

ないと強調しました。質疑の時間には、参加した古川黎明高校や東北大学の学生ら地域の若者が、千葉氏に対して質問や意見をぶつけました。また、河北新報記者の松田佐世子氏（六月一七日）、NHK仙台放送局ディレクターの大野太輔氏（七月二九日）からは、東日本大震災の報道をテーマとした講演を行い、参加者は震災報道のあり方、震災復興に報道が果たすべき役割とは何なのかを議論しました。

そして大崎未来塾の最終講義として一月二六日、北京外国語大学教授・郭連友氏による講演「中国における震災報道と日本イメージ」を行いました。郭氏は東北大学日本思想史研究室に留学しており、宮城県とは深い縁があります。現在まで、多くの日中両国要人の通訳を務めました。



郭連友氏講演会（1月26日）

今回の講演のテーマは、中国における三・一一震災報道と、中国の人々が震災をどう受け止めたかについてでした。郭氏は震災後、通訳としてほぼ休み無く二四時間態勢でNHKの報道を通訳し続けたことを語りました。そして、震災後の日本人の秩序ある行動や、中国人留学生二〇名を救い自らは犠牲となった

佐藤充氏は中国国民に大きな感動を与えているとし、震災を契機に両国の相互理解が深まったのではないかとしました。

講演後に学生から出た、領土問題など日中関係の先行きを懸念する声について郭氏は、草の根の相互理解は相当地に進展しており、領土問題についても事務レベルで水面下の密接な交渉が行われているはずだと語りました。そして若者に向けて、マスメディアを鵜呑みにせず、自分で見て自分で考えることが相互理解の第一歩だとメッセージを送り、講演会を結びました。

II アーティスト部門

アーティスト部門の講座は、仙台を中心に活動する劇団OCT/PASSの協力を得て、九月一六日から全四回にわたり、大崎市民活動サポートセンターにてコミュニケーションワークショップを行いました。

内容は舞台演劇の劇団らしい、ストレッチなどの基礎的なトレーニングに始まり、二人向かい合っただけ動きをする「鏡ゲーム」、全員で輪を

作りアイコンタクトのみでのキャッチボール、目をつぶり握手をして誰かを当てるという遊びなど、楽しみながら行うことができるメニューでした。また、猫しか登場しない台本の読み合わせや、声を使わず身体だけで植物の一生を表現するなど、本格的な演劇の稽古に近いものもありました。

活動全体を通して、身の回りの物事に対する「観察力」、そしてそれを人に「伝える力」が試され、鍛えられる内容だったと言えます。また、常に他の参加者の表現を見聞きながら行う内容だったため、各人の個人的感覚をぶつけ合い、学び合い、高め合う、極めて刺激的かつ有意義な時間だったと言えるでしょう。

III エコロジスト部門

エコロジスト部門は、大崎市の豊かな自然環境・農業環境を、いかに産業として、地域の発展と結びつけていくかを議論する、いわば応用編の講座でした。

六月三〇日は東北大学川渡フィールドセンターにて、農



バイオマス講座 (6月30日)

学部の中井裕教授を講師に、「再生可能バイオマスエネルギー」というテーマで講座を開講しました。中井教授は、バイオマスなど植物性エネルギー資源の研究開発に取り組んでおり、東日本大震災に直面して「被災地の救済には概念的ではなく具体的な取り組みが必要」と痛感したと語ります。研究者同士での横の繋がりを広げつつ、自らが中心となり、津波の塩害を受けた被災地で塩分に強いアブラナを選定して栽培し、採れた菜種油からのBDF(ディーゼル燃料)生産を中心とした持続可能な農業・環境産業の創出を企図する「菜の花プロ

ジェクト」を進めています。また、農場でのメタン発酵装置見学では、一台で一六世帯分の電力供給可能という性能、家畜のフンなど地域風土に根ざした永久的な資源を用いる点に注目が集まりました。講義後のディスカッションでは、バイオマスのエコロジカルエネルギーとしての側面に着目した意見が多く出ました。中井教授はこれに対し、バイオマスは原料の特性として地方が重要な供給地であり、施設整備などで地域に恒常的雇用をもたらすため、エネルギーに関し今までの地方↓都市(電力会社)という一方通行的経済関係から脱却し、「経済的循環型社会」を構築できる点を強調しました。

また、九月二九日には同所にてコンポストに関する講座、一〇月一四日には田尻地区の農家にて稲刈り体験を行い、農村を生かした新しい産業の可能性を探りました。また七月一五日には、丸田雅博・大崎市産業経済部長を招き、「大崎市の持続可能なまちづくり」をテーマとした講

座を開講し、丸田部長の着任以来の取り組みを聴くとともに、「大崎市のブランド力を高める手段」というテーマでディスカッションを行いました。丸田氏は総評で「一つの大崎市として売り出すには、ある程度、モノの取捨選択も必要」と語り、街おこしの厳しい面を語りました。

年明けの一月一八日には、大崎市田尻・蕪栗沼のマガンを描いた絵本『渡り鳥からのメッセージ』の作者・葉祥明氏の講演会を行いました。葉氏は、蕪栗沼とその周辺地域の「ふゆみずたんぼ」を、「自然と人間の調和」が見事になされた場所だと絶賛しました。また氏は、自然からの「搾取」ではなく、自然との「調和」という新しい価値観を広げていくには、自然に対する「感動」の共有が必要であると、日常の中の「感動」を、芸術というフィールドを通して再体験してもらうことが自分たち芸術家の使命と語りました。講演後には、蕪栗沼に移動してのマガンめぐら入り見学会も行われました。

団体見学・講演のご案内

団体見学

一月二三日、美里町立北浦小学校六年生の皆さん（児童二五名・先生二名）が見学に来てくれました。

最初に児童と先生の皆さんには研修室に入って頂き、パワーポイントを用いた簡単な解説を行いました。内容は吉野作造と大正時代を紹介するものに加え、北浦小学校のある美里町（旧・小牛田町）出身の同時代人である、千葉亀雄（一八七八～一九三五、文芸評論家・ジャーナリスト）と岩住良治（一八七五～一九五八、畜産学者）について解説しました。全体を通して、一方的な説明ではなくできる限り質問やクイズを行いながら進め、千葉については、美里町近代文学館の名前の由来、同館の壁の肖像画などと合わせて紹介しました。肖像画はなじみ深くても、誰なのかまでは知らないという児童もいたようで、関心をもって聴い



北浦小学校6年生の見学会
(11月13日)

てくれたようです。

その後、展示室では特に順繰りの解説は行わず、児童の皆さん各自の質問に答えていく形をとりました。北浦小学校の皆さんは大変積極的で、一生懸命に草書体の手紙を読もうとしたり、ワークシート課題に取り組んだりしていました。常設展示室の展示物の中では、吉野の人物相関図に注目する児童が多かったです。

その他、九月五日には宮城県文化財友の会の皆さん、一月と二月には尚絅学院大学の皆さんなど、多くの皆さんが見学に来てくださいました。

出張講演・講座

吉野作造記念館では、見学に来てくださる学校や団体のお客様向けに、オリジナルの見学プランをご用意いたします。また、出張講演・講座も受け付けております。詳しくは当館までお問い合わせください。

四月八日、大崎市立古川中学校の三年生の皆さん二五名を対象に、当館学芸職員による出前講座を実施しました。授業時間を利用した二〇分程度の短い講義でしたが、古川中学校の校訓である「常に正しきを求めて向上的な態度を持つ」という言葉に込められた吉野の考えを伝え、また吉野も取り組んだ関東大震災の被災者支援事業などを紹介しました。

講義後、生徒の皆さんにアンケートを実施させて頂きました。結果を概観すると、面白かった点や興味がわいた点として吉野の生い立ちに関する点を挙げる生徒さんが多く、やはり、偉人が自分たちの町でどのように生きていたかという身近な話題が一番面白く感じるようです。若い皆さんに、思想家・政治学者としての吉野の事績についての関心をいかに喚起するかが、我々の今後の課題と言えるでしょう。

また年明け後の二月九日には大崎市のパレットおおさきにて、宮城県



四月八日、大崎市立古川中学校の三年生の皆さん二五名を対象に、当館学芸職員による出前講座を実施しました。授業時間を利用した二〇分程度の短い講義でしたが、古川中学校の校訓である「常に正しきを求めて向上的な態度を持つ」という言葉に込められた吉野の考えを伝え、また吉野も取り組んだ関東大震災の被災者支援事業などを紹介しました。

講義後、生徒の皆さんにアンケートを実施させて頂きました。結果を概観すると、面白かった点や興味がわいた点として吉野の生い立ちに関する点を挙げる生徒さんが多く、やはり、偉人が自分たちの町でどのように生きていたかという身近な話題が一番面白く感じるようです。若い皆さんに、思想家・政治学者としての吉野の事績についての関心をいかに喚起するかが、我々の今後の課題と言えるでしょう。

また年明け後の二月九日には大崎市のパレットおおさきにて、宮城県

社会福祉協議会が運営する「宮城いきいき学園」の皆さんを対象に、当館大川副館長による講義「吉野作造と中国・朝鮮」を行いました。内容は当館にて所蔵している孫文・黄興ら中国革命家たちが吉野に宛てた揮毫などを紹介しながら、吉野が中国・朝鮮の独立運動や民主化運動に対して大いに共鳴し、協力を惜しまなかったことを説明するものでした。今日、これら近隣諸国との関係悪化が懸念されていますが、二〇〇年近く昔の日本で、信頼と愛情に基づく東アジア諸国のパートナーシップを構想した吉野のデモクラシー思想に、参加者の皆さんは共感を寄せてくれたようです。

清滝小学校見学会

二〇二二年一月二八日



一月二八日、大崎市立清滝小学校の六年生の皆さんが見学に来てくれました。

どの生徒さんも熱心に説明に耳を傾け、見学していただくことができました。また、吉野作造や大正という時代についてなど、難しいところをしっかりと予習してきてくれたのも感心でした。

見学会の後、清滝小学校の皆さんから、丁寧で心温まる沢山の嬉しいお手紙を頂きました。その一部をご紹介します。

お手紙①

六年 木村 勇気

拝啓 いよいよ冬を迎えましたが、いかがお過ごしでしょうか。

さて先日は吉野作造記念館でいろいろなことを教えていただき、ありがとうございます。

ビデオを見て吉野作造が政治学者であり大正デモクラシーのリーダーであることが分かりました。吉野一家はエリート集団であることも分かりました。恩師である細川松三郎のために石ひを建てるのはすごいなあと思いました。ほくだったら建てなかつたと思います。

古川に吉野作造という現在の政治を作った人がいてよかったです。機会があったらまた遊びに行きたいです。さようなら。

敬具

お手紙②

六年 渋谷祐太郎

拝啓 朝晩冷えこむように

なってきました。いかがお過ごしですか。

さて、先日は吉野作造のことについて、くわしく教えて頂きありがとうございます。ほくが印象に残っているのは、吉野作造の家が「吉野屋」という、糸やわた、新聞紙を売っている店だったということだと思います。ほくは、店だったというのを聞き、なぜ吉野作造は店をつがなかつたのかと疑問に思いました。また行ける時があれば行って勉強したいです。ありがとうございます。

敬具

お手紙③

六年 高橋みなみ

拝啓 寒い冬が近づいて来ましたが、いかがお過ごしでしょうか。

さて、先日の校外学習では、色々とお世話になりました。ありがとうございます。私は、吉野作造さんとは、だれなのか、どこにいるのか、分かりませんでした。でも、吉野作造記念館に行くと、ちゃんと分かりました。吉野さんは、政治学者になって、えらい人なのだなあと思いました。その他にも、吉野作造のやったことや、家の事、お父さん、お母さん、家族の

事なども分かりました。本当にありがとうございます。

敬具

お手紙④

六年 戸邊 優希

初秋の候、ますますの御健勝のことお慶び申し上げます。皆様かぜなどひかれてませんでしょうか。

さて先日の校外学習の際はいろいろと教えていただきありがとうございました。自由見学の際は吉野作造のことや吉野作造の関連人物のことなど、いろいろ教えていただきました。ありがとうございます。皆様から教えていただいたことを、これからの中学校生活で生かしていきたいと思っております。これからお体に気を付けてお仕事頑張ってください。敬具

お手紙⑤

六年 野中 悠

拝啓 冬將軍が近づいて来ています。

さて、先日は、校外学習で吉野作造記念館へ行ったときはお世話になりました。ありがとうございます。吉野作造についていろいろと教えていただきました。その中でも、特に印象に残ったことが二つありま

す。一つ目は、吉野作造はたくさんの子もも持っていたことです。長女がすごいということにもまたおどろきました。一つ目は大崎市にすごい人がいたということだと思います。吉野作造は大正デモクラシーや選挙制度のことに関わったことにびっくりしました。

みなさんもお体に気をつけてください。今回は本当ありがとうございます。ありがとうございました。

敬具

お手紙⑥

六年 千葉 悠生

拝啓、寒い冬がまた来ますが、いかがお過ごしでしょうか。

さて、先日の校外学習は、色々ありがとうございます。吉野作造さんのことをくわしく知ることが出来ました。私は今まで、吉野作造さんのことをあまり知りませんでした。大正デモクラシーという言葉は知っていました。でも、映像などを使って説明していただいたおかげで、言葉の意味も、吉野作造さんのこと、その時代のことも知ることが出来、とても勉強になりました。本当にありがとうございます。

敬具

古川第二小学校見学会

二〇二二年九月二三日



九月二三日、大崎市立古川第一小学校の五年生の皆さんが見学に来てくれました。

古川第一小学校は吉野作造の母校でもあります。見学会では、主に吉野と古川の街、そして古川一小との繋がりを中心とした説明を行い、その後は各自で自由見学となりました。

児童の皆さんは、母校の大先輩である吉野について一生懸命に調べ、新聞を作ってくれました。ここにその一部と、合わせて頂いたお手紙を紹介いたします。その他の新聞は、記念館受付近くにて展示しています。

お手紙①

五年 木村 蓮

吉野作造記念館のみなさん
先日は、おいそがしい中、吉野作造さんのことを教えていただきありがとうございます。

最初に見せていただいたスライドショーは古川第一小学校のために作ってくださいありがとうございました。

吉野作造さんの事や家族の

ことやいろいろな事がわかりました。

また行きたいと思います。

お手紙②

五年 佐藤 芽実

吉野作造記念館のみなさんへ

吉野作造

おいそがしい中ほんとうにありがとうございます。
おかげで私たちは吉野さんのことを知ることができました。
私たちは今、吉野さんの新聞を作っています。もう少しできあがるので楽しみにしてまわっててください。きつ

とみんなすばらしい新聞ができあがると思います。
スライドショーも私たちのために準備して頂きありがとうございます。
また今度、吉野作造記念館に行ってみてください。

「作造先生をたずねて」

五年一組 笠原 史

笠原さんは、政治家（政治学者）としての吉野作造に着目し、吉野が唱えた民本主義について、重要な点をしっかりと押さえて記事にしてくれました。吉野に負けない「伝えよう」という意思」が感じられる新聞です。

大崎市立古川第一小学校 第5学年 平成24年9月発行

作造先生をたずねて

政治家としての先生

作造先生は、政治学者として、大正デモクラシーを牽引し、民本主義を主張した人です。

民本主義とは、民主主義のモロロイを、考慮しないで、国民全体を考慮して、政治を行なうことだ。

民本主義とは、民主主義とは異なり、国民が政治の主人公であることだ。民本主義は、国民の権利を守るために、政治を行なうべきだ。

作造先生は、国民の権利を守るために、政治を行なうべきだ。

1906 中国へ家族とわかれ

1908 欧米留学

1910 東京帝國大学教授就任

1911 朝日新聞社に入社

1913 子で死去

作造先生の生きた時代

作造先生の子ども時代

作造先生は、政治学者としての吉野作造に着目し、吉野が唱えた民本主義について、重要な点をしっかりと押さえて記事にしてくれました。吉野に負けない「伝えよう」という意思」が感じられる新聞です。

「古川の…今昔新聞」

五年三組 加藤 咲良

とてもポップな文章とレイアウトで、読みやすい新聞です。他にも重要な箇所にアンダーラインを引くなど、見たことや聞いたことをそのまま書くのではなく、伝わりやすくする工夫が随所にあふれています。

四コマ漫画のハンサム吉野博士にも注目です。

大崎市立古川第一小学校 第五学年 平成24年9月発行

古川の…今昔新聞

発行所 24年 9月 18日 加藤 咲良

吉野作造の生誕地 古川

私達の生誕地は、吉野作造の生誕地である古川です。私達の生誕地である古川は、吉野作造の生誕地である古川です。私達の生誕地である古川は、吉野作造の生誕地である古川です。

感想
今回は、私たちの大先輩、吉野作造の事を調べ、今まで知らなかったことも知ることができました。

古川一小生がみた大先輩

「大先輩!! 吉野作造のあしあと」

五年一組 伊藤 一真

伊藤くんは、吉野の小学校時代の先生やスポーツとの関わりなど、吉野にまつわるこぼれ話的なエピソードに着目した新聞を作ってくれました。勢いのある見出しも目を引きまます。

大崎市立古川第一小学校 第五学年 平成24年9月発行

大先輩!!

吉野作造のあしあと

吉野作造の生誕地である古川は、吉野作造の生誕地である古川です。私達の生誕地である古川は、吉野作造の生誕地である古川です。

吉野作造の先生

吉野作造の先生は、吉野作造の先生です。私達の先生は、吉野作造の先生です。私達の先生は、吉野作造の先生です。

感想
吉野作造の先生は、吉野作造の先生です。私達の先生は、吉野作造の先生です。私達の先生は、吉野作造の先生です。

古川高等学校見学会

二〇一三年一月一〜二五日

一月一日、一八日、二五日の三回に分けて、宮城県古川高等学校の一年生、延べ二二〇名の皆さんが見学に来てくれました。

見学に先立ち、大川真副館長による講話が行われました。大川副館長は「民主主義国家とされている国はごく少数で、日本はその中で下位にある。理由は選挙の投票率、政治への関心が低いからだ」と説明しました。そして、吉野が生涯心血を注いだ「国民の政治参加の実現」は今なお日本の課題だと強調し、若い高校生たちに問題意識を持つよう呼びかけました。

見学後、頂いた感想の一部をご紹介します。

感想①

一年一組 佐藤 星哉

私は小学校の時に行ったことがあり、吉野作造記念館に行ったのは二度目でした。一度目に行ったときは名前を聞いたことがあるくらいで詳しくどのようなことをした人か

分かりませんでした。今回は講話や資料の内容と展示品をつなげて見学できたように思います。

今では民主主義が一般的ですが、改めて考えてみると、まだ天皇制が絶対という時代で民主主義を唱えるのは相当勇気がいることだし、命の危険も伴います。そんな情勢の中でも民主主義を説いた吉野作造の行動力はとてもすごいと感じました。また、そんな偉人が古川出身であることを誇りに思います。

感想②

一年三組 新田 梓

私たちの住む古川から政治の考え方、あり方を変えるような人が誕生しているということに驚きました。また、吉野作造の他にも、大崎からはたくさんの有名人がいると聞きました。

二年生では日本史を勉強するので、その時に、吉野作造のしたことなどをもっと詳しく学びたいと思いました。

記念館では、普段の授業では知ることができない吉野作造の生い立ちを知ったり、たくさんの資料を見ることができて、とても良かったと思います。

記念館の係の人から、「大崎の有名な物を教えて下さい」と言われて、そんなに思いつくものがなく、特色の無い所だと思っていました。大崎からは、日本や世界に誇れる人物が誕生していることを教わり、自分の住む大崎に誇りを持ち、大崎を知らない人に、こういう有名人たちのことを紹介できるようにならないといけないなと思いました。



感想③

一年六組 荒関 晋

日本を代表する政治学者が古川の地を踏んでいたことを

誇りに思います。吉野氏が提唱した民本主義は、今の社会の根底となっていて、それはヨーロッパ諸国に影響されたことがわかりました。当然、民本主義を否定した人もいたでしょう。それにもかかわらず、自分の考えが正しいと信じ、主張し続けたことはすばらしいです。しかし、吉野氏が没した後、日本は正反対の道突き進んでいきました。戦後になり、民主主義国家になった日本は自由と平等を手に入れました。

ミャンマーや中東では民主化を達成しようと頑張っている人々がいます。吉野氏の思想は今でも心に通じるものなのだと感じます。ただ、流血も伴っており、民主化への道は険しいと感じました。

今回の見学で最も重要だと思ったのは、あきらめないことです。努力し続けられ、良い事がおきるはず。私も努力し続け、人の役に立つことをしたいです。

感想④

一年六組 八島 咲子

吉野作造記念館を見学してみても、まず私が一番最初に思ったことは、小中学生に来た頃と比べて、記念館を通しての自分の視点が大きく変

わっていたところです。例えば、吉野作造さんが書いた手紙やハガキなどを見て、どんなことが書かれているのか自分なりに推測してみたり（全然分かりませんでした）して、色々なことを考えていました。見学において、私が一番面白いと感じた出来事は、映画を観た後に聞いた講話でした。私は、映画を見ても音声や画像に圧倒されているだけで、一体吉野作造さんは、何を伝えたくて民本主義を私達に唱えていたのか、など肝心なところを理解できていませんでした。しかし、あの講話を聞いたおかげで、吉野作造さんは「私達が、自由、平等になれる社会をつくってほしい」ということを伝えていたのだと分かりました。家に帰ってからは、流石に展示目録は難しくて、私では読めませんが、「作ちゃんのかほればなし」は夢中になつてすぐに読み終わってしまいました。吉野作造さんのキャラが少し分かって嬉しかったです。私は今回聞いた講話から、今の日本の選挙の投票率についての重要さを思い知らされました。これから日本の将来のため、「自分さえ良ければいい」とは決して考えずに、積極的に活動していきたいです。

当館学芸職員

研修報告

六月四日より五日間にわたり、大崎市古川の株式会社佐藤酸素（佐藤俊明社長）のご協力を得て、新人研修をさせて頂きました。同社は当館のサポーターでもあり、また佐藤俊明社長は、当館指定管理者であるNPO法人古川学人の副理事長でもあります。その縁で今回、お忙しい中快く引き受けて頂くことができました。

佐藤酸素は、主に医療用・工業用の各種ガスの取り扱いが専門ですが、周辺機器・器具等を幅広く取り扱う、総合商社事業も展開しています。私は五日間の間、古川李埜の本社と桜ノ目物流センターを往復し、社員の皆様に同行させて頂きながら、ご指導を頂きました。

佐藤酸素の一日は、社員全員での社屋周辺の清掃から始まります。この時、社長は毎日必ずトイレの清掃を行います。「お客様が最も不快に感じるのは、トイレが汚かった時。社のトップである自分が責任を持って美化に努めるのは当然」と、佐藤社長は語りま

す。朝礼では、「社是」「経営理念」そして「セブン・アクト」という言葉を全員で斉唱します。大きな声で、というのはもちろんですが、最

(株)佐藤酸素での研修

6月4日～8日

も大切なのは「朝礼のリーダーに合わせ、全員で揃えること」だということ。その意味は、実際の業務に同行させて頂く中で段々と理解ができました。

佐藤酸素の主力商品である医療用酸素ボンベなどの顧客は、病院や老人ホーム、あるいは在宅で闘病をしている方々です。一人暮らしの方もおり、皆さん、社員の方を家族のよう

うに迎えます。しかし、そういう方が嬉しさから話すと、体力を消耗し危険な状態に陥る可能性もあります。お客様をよく見て、一人ひとりに合わせた対応が必要なのです。また、営業も同様でした。納品や売り込みに行くだけではなく、ただ顔だけを出しに行く場合もありました。しかし、それが重要なのです。お客様と顔をつなぎ、何を欲しているかを観察する。社長や専務は「他社との競争を勝ち残るには、商品に付加価値が必要」と語ります。お客様をよく観察し、注意を払うからこそ可能な細やかな対応こそが同社の「付加価値」なのでしよう。

お客様を理解すること、「付加価値」の創造、これらは博物館にも重要なことです。その意味を考えると、かけがえのない五日間でした。

二〇二二年、吉野作造記念館に奉職した佐藤弘幸学芸員。昨年度、吉野作造記念館では新人職員研修の一環として、彼を次のような研修に派遣しました。その成果報告をここに記します。

NPO法人文化財保存支援機構（JCP）は、平成二〇年度から東京国立博物館と共催で「文化財保存修復専門家養成実践セミナー」を行っています。今回私は、東日本大震災で甚大な被害を受けた岩手県の陸前高田市立博物館にて開講された「陸前高田学校」に参加させて頂きました。今回は、同館の支援が目的でもありません。

JCP「陸前高田学校」

7月30日～8月6日

品で資料の安定を保つための処置です。

八日間を通して、染織品、カビ対策、民具、貝類標本、表具、洋書など、それぞれの保存の専門家の先生方から講義を受け、直接ご指導を賜りました。大学で保存科学を専攻したわけではない素人の私には難しい所が多かったですが、記念館での業務にも参考となるところが非常に多い、極めて貴重な経験でした。

何より、苛酷極まる状況の中で必死に資料の回収と保全を続け、多忙にも関わらず私たちを快く迎え入れて指導してくださった陸前高田市立博物館の職員の皆様には、心より感謝を捧げたいと思います。作業に取り組む職員の方々の背中こそが、現在の職を得た者としては最大の教訓でした。



貝類標本の保存処置実習
(NPO法人JCP提供)

のイベント

2013.3

▼こいのぼりメッセージ



▼広場ではフリーマーケット



GW イベント

2012・5・5

毎年恒例の子どもの日イベント。
様々な催しを企画し館内は1日
中子供達でいっぱいでした。

▼マコロンの不思議な部屋



吉野博士が
タイムスリップ

◀古川黎明中学校
高校コーラス部



▼チンプイさんの
マジックショー



2012・8・11 ファン・リレーション



大崎まちネタ集合サイト「エブリーとおおさき」との共催企画。
～出会う、つながる、好きになる～をテーマに、広場ではライブステージや屋台、館内ではメイクや陶芸絵付などのコーナーがあり、楽しむ人々で賑わいました。

ふるさとのファンが笑顔で
つながる。



2012・8・3 古川花火大会

花火大会に合わせて「大崎の風景」のライドショーとジュース販売をして、祭りの夜を楽しんでいただきました。



2012・12・16

クリスマスイベント

クリスチャンの吉野に因んで初企画したイベント。

▼マコロンとカイカイのビッククリスマス



サンタも登場。
なぞなぞとコン
サートで楽しい
クリスマス

▼大人気 クリスマスリース作り



これまで

2012.4

2012・9・6~10・21

ひと×つくる=展

古川高校出身、造形作家姉齒公也氏を中心に
集まった23名のアーティストの作品展。
復興応援として売上の一部を義援金に寄付し
ました。



▲訪れた方を幸せな気持ちにする作品の数々

2012・12・2

第13回読売・吉野作造賞受賞者
竹内 洋氏講演会

演 題

佐渡島の二人の政治家と敗戦後日本
—有田八郎と北吟吉—

2012年の読売・吉野作造賞は『革新幻想の戦後史』で関西大東京センター長の竹内洋氏が受賞しました。講演終了後はサイン入り受賞作を限定販売しました。

2013・1・29

生誕記念イベント

当館は1995年の吉野の誕生日に当たる日に
開館して18年目を迎えました。日頃の感謝
の気持ちを込めて企画したイベントです。尚
綱学院のご協力でDVD「GOODNESS —ブ
ゼル先生伝」も上映しました。

▼JOYCE コンサート



素敵な歌声が響き渡りま
した。

▼朗読



吉野の三女小松光子の
『その前後』を朗読しま
した。

二〇二二年三月～二〇二三年二月

寄贈資料一覽

多くの方のご厚意を得て貴重な資料をご寄贈いただきました。厚く御礼申し上げます。

「順不略」

（寄贈者）

- 〔資料名〕 雲柱社創立七〇周年記念 雲の柱に導かれて』
- 〔言語小説集〕
- 〔函解 日本史一〇〇人〕
- 〔ガリバーの冒険〕
- 〔作品でよむ関東大震災〕
- 〔東北学院資料室〕 Vol.11
- 〔子ども岩沼市史〕
- 〔久野収「集」I 他四点
- 〔革新幻想の戦後史〕 他一点
- 〔日本歴史〕二〇二二年八月号 他一点
- 〔武蔵大学五十年史〕 他二点
- 〔改革者 友愛会創立一〇〇年特集号〕
- 〔服部英太郎・文男遺文庫目録〕他DVD一点
- 〔古川市史〕第一巻 他九点
- 吉野信次 揮毫「恭則壽」
- 〔東海近代史研究〕第三三三号
- 〔南原繁 生誕一二〇年展を終えて〕
- 〔FORAM OPINION〕Vol.18
- 〔年表仙台一中・一高の百二十年〕
- 〔世間の学〕Vol.2 他一点
- 〔憲政常道と政党政治〕
- 〔渡り鳥からのメッセージ〕
- 〔鎌田三之助翁傳〕
- 〔明治天皇紀〕他二六点
- 〔宮城の歴史地理教育〕第二二号
- 〔臺灣大学 IHS News letter〕
- 〔丸山眞男記念比較思想研究センター報告〕創刊号 他六点
- 〔巷談辞典〕
- 〔仙台市文化財調査報告書〕第三七五集① 他八点

- 雲柱 小学館クリエティブ社
- 新 潮
- 文藝春秋
- 安藤北学
- 東 北
- 岩 沼
- 佐々木源一
- 中 央
- 手 嶋
- 武蔵学園記念室
- 友愛会創立を記念する会
- 尚 網
- 大 崎
- 白 井
- 田 村
- 伊 藤
- NPO現代の理論社会フォーラム事務局
- 宮 城 県 仙 台 第 一 高 等 学 校
- 古 森
- 小 崎
- 大 崎 市 産 業 政 策 課
- 大 崎 市 教 育 委 員 会 鹿 島 台 支 所
- 平 野
- 宮 城 県 歴 史 教 育 者 協 議 会
- 台 湾
- 丸 山 眞 男 記 念 比 較 思 想 研 究 セ ン タ ー
- 河 出 書 房 新 社
- 仙 台 市 教 育 委 員 会

利 用 案 内	開館時間	9時～17時（入館は16時30分まで）			企画展開催中	
	入館料	区 分	個人	団体(20名様以上)	個人	団体
		一 般	310円	250円	500円	400円
		高 校 生	210円	160円	300円	200円
	小・中学生	100円	80円	200円	100円	
休 館 日	月曜日（但し、月曜日が祝祭日の場合は翌日が休館日となります。） 年末年始（12月29日～1月3日）					

アップライトピアノ一台
被災地に
ピアノをとどける会様
合同駐車場内「学人の塔」修復
古川東ロータリークラブ様
ご寄付をいただいた皆様
和泉敬子様
郭連友様、龔穎様

〒989-6105 宮城県大崎市古川福沼1-2-3

TEL 0229-23-7100

E-mail yoshino-npo.fg@blue.ocn.ne.jp

URL http://yoshinosakuzou.jp

吉野作造記念館

株式会社 北都開発	やればできる 内藤印刷株式会社	ふるしん 古川信用組合	chida 株式会社 千田清掃	Swan グートスワン
観光ホテル 鳴子	お酒と食料品のお店 合名会社 佐々源商店	安心と満足を追求め! ガスは佐藤酸素! 太陽日酸株式会社特約店 株式会社 佐藤酸素	環境と健康の大切さを共に考える WAGATUMA.K.K 我妻建設株式会社	旅館 青葉荘
古川ガス 株式会社	株式会社 環境開発公社 MCM	有限会社 アクセス	株式会社 美 研	株式会社 大昇物流
株式会社 共同システムサービス	(株) アメリカヤ	匠・和膳 さたはま	古川名物 ママも喜ぶ! 松倉	（有）若見自動車整備
損保ジャパン				